

## 第 36 回日本自殺予防学会総会を終えて

第 36 回日本自殺予防学会総会

大会長 飯森眞喜雄（東京医科大学精神医学講座）

第 36 回日本自殺予防学会総会を、副大会長である高橋伸忠富士心身リハビリテーション研究所附属病院理事長とともに、2012 年 9 月 13 日～15 日、ベルサール新宿グランドホールにて開催いたしました。一般演題は 86 題、参加者は 550 名を超え、まずは本学会を長年支えていただいている齋藤友紀雄理事長と、張賢徳事務局長、理事、評議員、会員、参加者、そして座長と演者の皆様に感謝申し上げます。また、スムーズな学会運営をしていただいた MC ミューズのスタッフと東京医科大学精神医学講座の市来真彦事務局長と木村智城実行委員長をはじめとする医局員、協賛を賜った精神科病院とメーカーに御礼申し上げます。

本学会が 1970 年に増田陸郎先生のご尽力により研究会として発足し、1980 年から学会として活動を始めた経緯を、日本の自殺予防学の開祖であった加藤正明先生のお傍にいて目にしてきた者にとって、今大会の盛況ぶりは実に感慨深いものがあります。今でこそ自殺問題は国を挙げての喫緊事となっていますが、当時は精神科医でさえほとんど関心を持たず、参加者も数えるほどしかいませんでした。今より自殺者数は 1 万人以上少なかったとはいえ、その頃から日本は自殺大国でしたから、参加者の少なさと精神科医の無関心ぶりは、日本人の「触れずにおきたい…」「仕方がなかった…」といった自殺感や死生観と通底するものがあるのではないかと思ってきました。自殺と最も関係が深いといわれているうつ病など精神疾患の早期発見・治療が進んでも、自殺者は依然として多いままです。

こうした疑問から、今回は大会テーマを『日本ではなぜ自殺が多いのか？—改めて背景と予防法を考える—』とし、原点に立ち返って、改めて日本の自殺について考えてみることにしました。そこで、次のような 4 題のシンポジウムを組みました。①うつ病の早期発見と治療は本当に自殺の減少につながるのだろうか？という疑問から、『自殺とうつ病との関係再考』、②折しも大きな問題となっていた学校での「いじめ自殺」をはじめ、死にたいと訴える若者が増えている現状を探る『若者の“死にたい”を扱う』(市民公開)、③近年注目されている『睡眠障害と自殺』、④今なお物理的にも精神的にも回復せず、自殺者も多い、震災後の現状を踏まえた『東日本大震災を通して生きる意味を考える』です。ここでそれぞれの内容と反応にふれる紙幅はありませんが、どのシンポジウムも刺激的で示唆に富むものであったと思います。

特別講演として、長年にわたり精神科医として自死遺族のこころのケアにもあたられてこられた、我が国を代表する精神療法家である山中康裕京都大学名誉教授に『自死遺族のこころを癒す』と題するご講演を、最終日に市民公開の形でお願いいたしました。ご自分が治療者として関わってこられたケースが多いのでやりにくいのではないかと依頼者とし

て危惧しましたが、杞憂に終わりました。さすがにユング派の表現療法家だけあって、奥深く象徴的で隠喩的なスライドをお見せしながらの“山中節”で、あっという間の1時間が、深く静かな長い余韻の尾を引きながら終わりました。聴衆は自分の心に滲み出てきたさまざまな感慨とカタルシスから我に返るのにしばらく時間を要したのか、講演終了後やや間をおいてから満場の拍手が沸き起こったのが印象的でした。

会長講演では、『日本人と自死』と題し、精神医学的視点を交えながら、文学や映画、流行歌、円谷幸吉氏の遺書などを通して見た日本人の自死への心の傾きを述べてみました。私は常々、日本人の自死への傾きを理解しないと真の自殺予防はできないのではないか思ってきたので、その断想を伝えたつもりです。

この他、ランチョンセミナーを4題、①「自死遺族となって気付かされたこと」(松井浩氏)、②「職域におけるうつ病対策と治療継続の重要性」(五十嵐良雄氏)、③「自殺予防の基本戦略」(張賢徳氏)、④「横浜市大・横浜市における自殺未遂者ケア事業と今後の自殺対策の展望」(平安良雄氏)を開催しましたが、いずれも参加者が多く、どれも充実した内容で、お弁当よりも満ち足りたものになったのではないのでしょうか。

一般演題でも、切実なテーマや地道な調査、地域や行政サイドの試みなど多彩であり、どの会場でも活発な意見交換が行われました。

2012年は1998年以降はじめて自殺者数が1割ほど減少し、3万人を割りました。本学会および会員の地道な研究と実践が減少にいくらかでも貢献したとしたら幸いであるし、また今後もそうであることを願いつつ報告を終えたい。